

論文(Article)

カウンツ教育理論の諸評価

Evaluations of George S. Counts' Theory of Education

甲斐 進一
Shinichi Kai*

摘 要

進歩主義者の中で、教育による社会改造を謳った代表的人物であり、改造主義者ブラメルド(Theodore Brameld)にも大きな影響を与えたカウンツの1932年の講演に対して、1930年代、40年代の進歩主義者たちがどのように評価したかを考察した。

キーワード：インドクトリネーション、児童中心主義、教育による社会改造

Key Words : Indoctrination, Child-Centered Education, Social Reconstruction through Education

はじめに

カウンツ(George S. Counts)の1932年2月の進歩主義教育協会年次大会の講演「進歩主義教育は進歩的でありうるか」¹⁾(同年の著書『学校は新しい社会秩序をつくりうるか』²⁾にも他の2編の論文と共に掲載されている。)は、当時の進歩主義教育者に対して大きな影響を与えた。ニース(Richard Niece)とビーチニッキ(Karen J. Viechnicki)は、次のように講演の意義をコメントしている。³⁾

1. カウンツは、進歩主義が、その重力の中心を、もはや子どもではなく、アメリカ生活の全範囲にわたる社会福祉におくことを要請した。
2. カウンツは、進歩主義のカリキュラムが、道徳的無関心を排除し、すべてのもののためによりよい世界を生み出すと考えられる社会主義的見解のインドクトリネーションを基盤にすることを要請した。
3. カウンツの講演に対する評価は、鼓舞的であるというものから、非実践的で反アメリカ的というものまで多様であり、進歩主義者の間に以降白熱的論争を生み出した。

本稿は、カウンツの教育による社会改造論が1930年代から40年代にかけてどのように評価されたか、彼の教育理論を巡る論争が現代教育を考える上でどのような意義を持っているかについて、明らかにしたい。

一 シーズの評価

シーズ (Nellie M. Seeds) は、論文「社会変革のために教育すること」⁴⁾ (1932 年) で、進歩主義教育協会が個々の子どもの問題や必要に留意し、生活状況の角度から学習概念を捉えていることを評価しながらも、カウンツの講演に注目して、協会の進歩主義教育運動の中産階級的な個人主義的人生哲学を批判している。シーズは、現状を変革する主要な衝動は、安楽よりもむしろ不満から生まれ、かつ、その衝動の成長発展は、不満克服のための生産を可能にする新しい社会秩序を目指す社会化された哲学を前提とすると考えている。すなわち、彼は、そのような社会哲学が、社会福祉理論についてのカウンツの提案を基礎とすべきであると主張している。

具体的方策として、シーズは、事実の提示には誇張、歪みが充満していることに鑑みて、1 現在の経済的、社会的興味の問題に関する教師、親、コミュニティの他のメンバーとの討論集団へ学校が参加する、2 小学校、中等学校教師が経済学、社会学、現在の大恐慌の原因について知る、3 教師がコミュニティのダイナミックな或いは社会的力として活動する、ことを重視している。「子どもの限界は大部分教師の限界である。」⁵⁾ というのがシーズの立場である。この視点は、カウンツの講演に対するモース (Lucia Burton Morse) やハナ (Paul Hanna) の次のコメントにも見られる。

「われわれは変化する世界でわれわれの子どもたちが生きる準備をするであろうが、しかし、最初に、親、教師、市民として、われわれはこれらの変化を理解することができなければならない。」⁶⁾

「カウンツ博士の挑戦に応える際の最大の問題は、大学、師範学校、継続的な現職再訓練における教師訓練であるように思われる。これは教師訓練の新しい哲学と学校行政官、管理者、校長の側の啓発された指導性を必要とする。」⁷⁾

約言すれば、シーズは、進歩主義教育が真に進歩主義的であるために、中産階級的個人主義、児童中心主義から脱却して社会改造の立場を重視するカウンツの立場をとることと、社会についての教師の理解の増進のための教師教育に努めることを要請しているということができる。

二 ヒッカーソンの評価

ヒッカーソン (J. Allen Hickerson) は、児童中心学校が、インドクトリネーションないしプロパガンダに従わないオープン・マインドの子どもの育成を目指し、学校と子どもが真空の中で存在するかのように対処してきたことを批判し、カウンツの次の見解を支持している。⁸⁾

「社会を揺り動かす大きな論争点に関して中立であることは、多分理論的に可能であるが、実践的には戦いに関与する最強の力に支持を与えることと同等である。」⁹⁾

ヒッカーソンは、今日の大きな論争点が、所有権対人間の権利であると捉えてい

る。所有権を謳う立場は、競争、利益追求動機、私的資本主義を価値付け、人間の権利を重視する立場は協同、細心のプランニング、社会化された経済を価値付ける。所有権の支持者は、中産階級以上の人びとであり、人間の権利の支持者は、マルクス主義者、社会主義者（資本主義から社会主義への平和的変革——投票の活用による変革——を社会的進化とみなす人びと）、憲法で保障されたコモンマンの自由の復古を唱える人びと、現在の社会的危機について次第に認識するようになっている小集団の芸術家、作家である。ヒッカーソンは後者の立場はまだ強力ではないと考えている。

「教育者たちは何のために教育すべきか。われわれはどちらの側に立っているのか。われわれは所有権の不可侵性思想を普及させるべきか、個人的競争を促進すべきか、個人的成功のために教育すべきか、粗野な個人主義を強化すべきか。それはわれわれが為してきたことである。われわれは方向を変えて協同、社会集団への責任、根本的な論争点の英知的評価のために教育できるか。われわれは個人的成功ゴールの代わりに社会的ゴールを子どもと若者に吹き込む（imbue）ことができるか。」¹⁰⁾

ヒッカーソンは、子どもの英知が、インドクトリネーションあるいはプロパガンダに支配されないオープン・マインドによってではなく、子どもの生活する社会に関心を向け、社会的ゴールを子どもに吹き込むことによって成長すると信じている。吹き込むとはインドクトリネーションと同義と考えられる用語である。同様に、ハルサイザー（Allan Hulsizer）¹¹⁾も、教育的指導者たちが教育の機会均等のビジョンを欠いていることを問題視して、そのようなビジョンのインドクトリネーションの必要を認めている。

ヒッカーソン、ハルサイザーのインドクトリネーションの捉え方は、カウンツの見解に沿ったものと考えられる。しかし、根本的な論争点についての英知的思考力の育成が特定の立場のインドクトリネーションないし吹き込みによっても果たして可能であろうか。この点に関してヒッカーソンらの説得力のある説明が望まれる。

三 ホームズの評価

ホームズ（Henry W. Holmes）は、1932年の論文「教師の政治学」¹²⁾で、進歩主義的私立学校の支持者たちが、貧困、犯罪、病気、不正のような社会の現実を子どもたちに知らせようとしない、ベブレン（Thorstein Veblen）によって特色付けられた有閑階級教育観を持っている、と批判したカウンツの支持を表明している。しかし、ホームズはインドクトリネーションに関するカウンツの見解には異論を唱えている。

ホームズは、インドクトリネーションの意味を次のように捉えて、カウンツのインドクトリネーション解釈を批判している。

「インドクトリネーションという用語は、1つの観点、観念、プログラムの偏見ある、無反省的、無批判的受容をもたらそうとする努力を意味する。それはプロパガンダ、情動、利己的興味、偏見への訴えを含意する。」¹³⁾

それでは、インドクトリネーションを避けるために何がなされるべきか。ホームズはおおよそ次のように述べている。

人びとの間に、意見、信仰、確信について幅広い相違がある。目下論争的である問題は、問題の全側面に公平であるべき最大の良心的努力によって学校で取り扱われねばならない。したがって、学校は、子どもの発達に適切な形で論争点を取り上げる必要がある。学校は少なくとも審判員でなければならない。おそらく、最善の方法は、対立集団の材料を公平に活用し、教師と生徒によって得られる他のものを付加しながら、問題をカリキュラムに取り入れることである。この視点から考えるとき、カウンツは、深刻な論争的問題への対処法を誤っているように映る。教師は、公的役人であり、彼の生徒たちへ多数者が激しく非難する観念、原則を真理として押し付けることはできない。そのように教えることは、危険であるのみならず、不公平でもある。もちろん、教師は単に国の代行者ではない。国は、不変の形態、信仰、原則によって定義される固定した実体ではない。教師は現にある国について教えると同様将来生成するかもしれない国についても教える義務の下にある。したがって、教師によるティーチングは破壊的でも反動的でもあってはならないことを理解せねばならない。教師は事実と原理の両方の角度から現存の国のすべてを正当に考慮せねばならない。

また、ホームズは、アメリカの教師が教育を個人の発達にのみに目を向けて、社会的角度から考える習慣を持たなかったために、教育が社会のどのような改善を考えるべきかを問うことは新たな挑戦であり、必要なこととみなしている。しかし、ホームズは、教師が社会的問題、例えば、禁酒法、力の公的所有、関税、バスコントロール、労働組合組織、失業保険等のアメリカ社会の現実的問題について自らの専門的見識を発展させることを待つことなく、カウンツの見解をインドクトリネートすることには、抵抗を感じている。

このように、ホームズは、カウンツのインドクトリネーションの立場を擁護しない。しかし、次の場合に、ホームズはインドクトリネーションを擁護する。「現在の論争点は、現在のディレンマを理解するための未来の善の観点がないなら、重要性を持ち得ない。もしカウンツ博士が、未来の善の見解を明白な魅力的な色で描く範囲でのみ学校が“インドクトリネートする”ことを要求するなら、私は彼の立場を支持する。」¹⁴⁾

ホームズの主張をどのように評するべきか。未来の善について、具体的に論ずれば、そのことについても、論が分かれる可能性がある。したがって、未来論といえども、インドクトリネーションに訴えることは、特定の立場を子どもたちに植え付ける恐れがある。ホームズは、未来の善についても、インドクトリネーション以外の方法で、すなわち、少なくとも、生徒からの批判の余地を認める仮説的なものとして提示すべきであると考えられる。

四 カミングズの評価

カミングズ (Milton C. Cummings) は、論文「学校は如何に新しい社会秩序をつくりうるか」¹⁵⁾ (1932 年) で、カウンツの『学校は新しい社会秩序をつくりうるか』(1932 年) の主旨に共鳴しながらも、カウンツが新しい社会秩序を打ち立てうる方法論を明記しなかったことに以下のように不満を表明している。

カウンツは、ゴールがインドクトリネーションによって教えられうると主張している。しかし、思考技術の完全習得がカウンツの目指すものの達成を保証すると共に、真の社会革命を生み出す。社会科のティーチング技術としては、(1)問題の明確な定義、(2)問題に対処する多くのプランの定式化、(3)各プランの吟味、(4)よいプランの一時的受容、(5)新しい証拠に直面してプランの改正¹⁶⁾ が考えられ、この過程を経て真の社会革命が主張できる。したがって、カウンツの方式はカウンツの社会観を従順に受容する習慣を奨励するにすぎないものであり、結果的に保守的といわざるを得ない。

カミングズは、自己の立場がデューイ (John Dewey) から支持されうると考えている。

デューイは、彼の長い思索の年月の最高点に至っている『確実性の探究』(1929 年) の第 9 章「方法の優位」で、われわれの遠い理想が実現されるための技術と方法の絶えざる探究の重要性を強く申し立てているからである。¹⁷⁾ アメリカン・ドリームは極めて大切にされるべきであるが、しかし、同時に、そこへ至る能力を育てるべきである。

このように、カミングズは、カウンツが、保守主義と反動の力への抵抗、よりよい社会秩序のプランニングの冒険を学校に要請したことに共鳴しながらも、これをインドクトリネーションを通して生徒たちに一方的に与えるカウンツの見解に疑義を抱いている。すなわち、カミングズは、カウンツのように探究の過程を省略して子どもたちに結果のみを伝えることが、彼らに新しいドグマを与え、そのドグマが過去の誤りを反復し、それが社会生活を推進することを懸念して、子どもたちによる結果に至る方法の完全習得を要請している。

五 キルパトリックの評価

キルパトリックは、1932 年に『教育と社会的危機』¹⁸⁾ を著し、直接カウンツの名を挙げてはいないが、カウンツの見解に以下のように厳しい評価を行っている。

近年、新しい考えを持つ人びとは、子どもが所与の集団に生まれ、そこで成長することがその世界観を必然的にインドクトリネートされることであり、これは悪いことではなく、むしろよいことであり、このインドクトリネーションの失敗が文化を持たない子どもを生み出すと考えている。したがって、新しい考えを持つ人びとは、ど

のような文化がインドクトリネートされるべきかに関心を向けている。すなわち、現在の米国において、旧式の有害な制度や文化、特に経済的システムがインドクトリネートされているので、新しいものをインドクトリネートする必要があると述べている。キルパトリックは、この見解が、現在の状況を考慮するとき、ある程度理解できる面があることも認めている。

しかし、インドクトリネーションに関しては、キルパトリックは、次のように否定的見解を表明している。

現在の環境下で、確信に到達できないほどオープン・マインドを崇拝することは許されないことである。しかし、インドクトリネーション擁護者が、思考と行動の間の本質的対立を想定していることも問題である。思考は行動の先行的、準備的側面として捉えられるべきであり、両者は1つの連続的過程の関係にあり、絶え間ない吟味を伴う行動ができる人間が、英知の人間である。経済の問題を取り上げれば、一度限り計画された経済よりもプランニング経済を採用することが望ましいということになる。換言すれば、よい市民は、熱意と確信という指導性を持ちながらも、絶えず英知的理解に努める人びとである。したがって、熱意と確信は思考や評価と対立すると考えるべきではない。インドクトリネーションは「あるものの長所に関して、後ほどたとえ疑問視する合理的理由が生じるとしても、疑問視できないように、あるいは将来疑問視されないようにあるものをティーチすることに着手するある種の教育」¹⁹⁾、「学習者を考察中の事柄のよりよい独立的判断者にするようにティーチする意図を持たないある種の教育」²⁰⁾と考えられるものであり、インドクトリネーション擁護の立場をとることはできない。確かに、集団文化が若者の発達に影響することは疑問の余地のないことであるが、この影響が、即インドクトリネーションになることには同意できない。集団における年長者が文化的現状の独断的支持者であり、かつ文化批判を認めない場合、教育とインドクトリネーションは同一視される可能性はある。しかし、年長者が文化の存続のために批判と再形成を必要とすると考えるなら、若者はインドクトリネートされる可能性が小さい。したがって、集団文化の若者への伝達がインドクトリネーションになるかどうかは、文化の性格次第であり、幼児期以降の文化の伝達をそれだけでインドクトリネーションとはみなすことはできない。

このように、キルパトリックはインドクトリネーション擁護論を批判している。ただし、幼児期の教育に関しては、キルパトリックは、方法論的には、インドクトリネーションと教育との区別が困難であると考えている。²¹⁾したがって、彼は、この段階での両者の区別を、教師の意図から行っている。その理由は、幼児期では教師が望ましいと考える習慣や態度の理由を説明する前にティーチすることが必要になるからである。しかしながら、可能な限り速やかに、子どもたちが理解できる年齢になったら、教えられた習慣や態度について説明し、以前に受容した習慣や態度を批判的に再調査することを要請することが大切である。これが実践されないとき、子どもは、幼稚な観念に隷属して生きることになるからである。

以上の理由から、キルパトリックが理想とする教育は次のようになる。

「もし、私が、若者をティーチしているなら、彼らが彼らの周りの生活の欠点と可能性、その欠点を正す方法とその可能性をよりよく達成する方法について、次第に有意義に鋭敏になる様な方式で彼らが成長することを、彼等に対する最高の義務と感ずるであろう。なぜなら、私は、彼らがこのように成長するなら、彼らが個人として幸福であると同時に、より良いことのために努力している他者と有効に協同すると信じるからである。」²²⁾

この場合、教師の確信はどのように子どもたちに伝達されるのか。教師の確信、すなわち、教師が持っている最善の知識は、生徒たちに探究の際の重要な材料として提供されることになる。しかし、教師と同じ結論に至ることを願ってではなく、子どもたちが独力で思考し、決定することを願ってのものである。

キルパトリックは、カウンツと同様に、大恐慌期のアメリカ社会を、大量生産を可能にしたテクノロジーによって、レッセ・フェール経済からプランニング経済への変革が必要になった社会と捉えた。しかし、プランニング経済を支える政治的民主主義のモデルとして、カウンツはロシアのCommunismやイタリアのファシズムに注目した²³⁾が、キルパトリックはそうではなく、この点ではキルパトリックはデューイ²⁴⁾と立場を同じくしていた。

六 タイラーの評価

タイラー (Ralph W. Tyler) は、1944 年の論文「アメリカ生活の改善のための学校の責任」²⁵⁾で、カウンツの『学校は新しい社会秩序をつくりうるか』(1932 年)に論及している。タイラーは、学校とコミュニティとの関係について、アメリカでは以前から論じられていたが、すべてのものが容認しうる定式化はまだ提案されていないと考えている。1932 年のカウンツの主張によって、論争は促進されたが、教育を通しての社会改革はナチの実践と同一視されるものとして、多くの教育者たちは中立性の概念に関心を持った。その後、戦争への関与によって、中立性の方策は転換された。タイラーはこの動向に関連して以下のように誤解の回避を求めている。

「学校がアメリカ生活を改善する責任を持つということは、この論文の命題である。しかしながら、アメリカ生活を改善することは、社会組織と経済制度の特定の青写真の実現のための道具として学校を活用することと混同されるべきでない。」²⁶⁾

タイラーは、学校によるアメリカ生活改善のために次の2つの方策を提唱している。第一の方策は子どもの改善、すなわち人道的な感情、批判的思考力、創造的活動力を持った生徒を育成することを通してである。第二の方策は、教育的な社会環境を創造し、維持することを通してである。子どもの教育を制限し否定する要因としては、タイラーは、プロパガンダ、趣味を失わせ生活を平凡にする美の欠如、若者に自己方向付けの経験とそれに伴う責任を負う機会を与えない親の過保護、教師が人間味のあ

るガイダンスに努めない学校教育，を挙げている。これらのネガティブな条件の除去に努めることが学校の責任である。

タイラーは，カウンツの社会改造論に刺激を受けながらも，上記のように，社会組織，経済制度の特定の青写真を実現する手段として学校を活用することを学校による社会改造とみなすカウンツの立場を批判している。タイラーにとって，カウンツの立場は，インドクトリネーションと党の直接的目的への貢献とを認めるナチの学校プログラムと識別困難になるというのである。

七 ビューの評価

ビュー（Jesse J. Pugh）は，1948年の論文「インドクトリネーションのディレンマの角」²⁷⁾で，インドクトリネーションに関連して，2つの主要な立場を取り上げて論評している。一つは，「すべてのティーチングはインドクトリネーションであるという見解」²⁸⁾であり，カウンツの見解はこの立場に位置する。他の一つは，論争的な問題に関して中立の立場をとるとき，学校はその固有の機能を遂行しているという見解である。

ビューは前者の問題点を以下のように指摘している。

「この角度から教育を考える人びとは，どの伝統が特別にアメリカ的かを正しく決定するという困難な課題に直面する。なぜなら，アメリカ文明は極めて多彩な影響を与えられているからである。」²⁹⁾

他方，後者の学校の中立的立場を要求する見解に関しては，次のように評している。

(1)生活の論争的側面を除外する教育計画に適應する無色のパーソナリティを持った教師を社会が歓迎するとは考えられない。(2)教師が完全に中立の立場をとっていると信じる時，多くの場合，自覚しないまま現状のためにインドクトリネートしている。「学校そのものの保守的本質は，この傾向を促進しがちである。古くから，一般に受容された教育目的は，現存の文化的パターンの一つの世代から次世代への伝達であった。」³⁰⁾

したがって，「すべての教育がインドクトリネーションである」という見解が説得力を持っているように思われるが，ビューはインドクトリネーションを肯定することはない。ビューは以下のような特色を有する第三の立場を提案している。

(1)教師が多様な見方がある問題や解答の側面のみを提示する場合，インドクトリネーションとなる。しかし，科学的に立証された事実をティーチすることはインドクトリネーションではない。

(2)インドクトリネーションを支持することは，絶対主義の哲学を支持することになる。教師は知的自由を保障する学校環境の創造に努めるべきである。

(3)インドクトリネーションは，偏向性の表現や論争的な問題点の一面のみを取り上げることと必ずしも同一であるとは限らない。インドクトリネーションは関与と同様

に子どもの思考範囲を狭める除外の立場からも考察されねばならない罪である。

(4) インドクトリネーションを回避するために、教師は、生徒の思考範囲を狭め、かつ社会パターンの連続的な改造を生徒に奨励しない傾向があるすべての影響から学習内容を防御するように、学習内容に常に批判的である必要がある。

(5) 学校はカリキュラム内容の独裁的決定者となるべきでない。「未来の世代の態度と信念に対する責任は、すべての利害関係を持つ社会集団の共同的責任である。」³¹⁾

上記のように、ピューはカウンツ的なインドクトリネーション観および学校の中立論を批判すると共に、インドクトリネーションを悪い意味に限定して用いている。なお、ピューの(1)の「科学的に立証された事実をティーチすることはインドクトリネーションではない」という説明は正確さを欠いている。確かに、科学的に立証された事実は、現時点で、最も信頼に足る見解（仮説）であることは否定できない。しかし、科学的に立証されたものといえども、それを絶対視してティーチすることは、将来、修正ないし否定される可能性があることを容認しないインドクトリネーションとなると考えられるからである。

結語

本稿は、主にカウンツの1932年の教育による社会改造論に対する1930年代から40年代における評価の動向を考察した。

シーズは、カウンツの社会改造論に共鳴し、進歩主義教育が真に進歩的であるために中産階級的個人主義哲学からの脱却と、教師の社会理解を促進する教師教育の重要性を謳っている。ヒッカーソンは、子どものオープン・マインドの思考を重視して社会の問題について中立的立場に留まることは、当時の支配的勢力である中産階級以上の人々の価値観を擁護することになり、所有権よりも人間の権利を重視する社会的ゴールを子どもたちにインドクトリネートすることが重要であると主張して、カウンツの立場を支持している。しかし、ヒッカーソンの場合、子どもの英知的思考力の育成を犠牲にすることなくインドクトリネーションの擁護がどのようにして可能かの論議が欠けている。ホームズは、カウンツが社会の現実を子どもたちに正視させ、富よりも頭脳と勇気に重きを置く民主主義を目指す限り、カウンツに賛同するが、カウンツのインドクトリネーション観には異議を表明している。カミングズは、カウンツが保守主義と反動の勢力に対抗する社会秩序のプランニングを要請したことを評価しながらも、カウンツがその立場に生徒たちが至る方法よりもその立場をインドクトリネートすることに関心を持っていることを批判している。キルパトリックは、子どもが成人から基本的な生活習慣を学ぶことを一律にインドクトリネーションとみなして教育とインドクトリネーションを一体視するカウンツ的立場を批判している。キルパトリックにとって、教師の信念も他の見解とともに生徒たちが吟味する材料の一つにすぎないものであり、生徒が教師と同じ結論に到達し、同じ信念を持つことになるか

否かは予期できないことだからである。独力で思考する人間の育成こそキルパトリックが目指すものであり、そのような人間が最終的には、キルパトリックの見解に至りうるとというのが、彼の暗黙の信念と考えられる。タイラーは、カウンツの社会改造論に刺激を受けながらも、特定の社会組織、経済制度の青写真を実現する手段として学校を活用するカウンツ的社会改造論をプロバガンダとみなして、容認しない。タイラーは、個人の育成と教育的環境整備に努める学校が真の社会改造を果たしうると主張している。ピューは、多様な見方のある問題の一側面のみを教師が提示する場合、インドクトリネーションとみなし、科学的に立証された事実をティーチする場合はインドクトリネーションとはみなさない。すなわち、彼は、インドクトリネーションと教育を内容に基づいて区別している。しかし、科学的に立証されたものでも、学習者が絶対視するようにティーチされれば、インドクトリネートされたと考えられ、内容に基づく区分だけでは不十分であると考えられる。また彼は、インドクトリネーションが絶対主義哲学に基づいたものとみなし、これを回避するために、知的自由の学校環境を整備することを重視し、カウンツのように肯定的にインドクトリネーションを捉えることはない。

上記の論者のうち、ホームズ、カミングズ、キルパトリック、タイラー、ピューはインドクトリネーションに批判的姿勢をとっており、カウンツのインドクトリネーション論の支持者は多くない。しかし、教育が社会の問題に積極的に取り組む姿勢は概して容認されており、児童中心主義の名の下に学校と社会の分離を支持する見解は見られない。

現在、アメリカの学校教育は、2001年に制定されたNCLB法（No Child Left Behind Act、どの子ども置き去りにしない法）の下にある。この法律は、経済的不平等、貧困などの克服策として、すべての子ども達の読解と数学の熟達のための教育を推進している。この方法論として、あまりにもハイスティクステストの結果やアカウンタビリティを重視することは問題視されるが、カウンツが取り上げた教育と社会の関連の問題は、21世紀においてもなお重要な課題であることを、NCLB法は示している。

■注

- 1) G. S. Counts, "Dare Progressive Education Be Progressive?" *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932.
- 2) G. S. Counts, *Dare the School Build a New Social Order?* The John Day Company, 1932.
- 3) R. Niece and K. J. Viechnicki, "Recounting Counts: A Review of George S. Counts' Challenge and the Reactions to 'Dare Progressive Education Be Progressive?'" *The Journal of Educational Thought*, Vol.21, No.3, December 1987, pp. 149-150.
- 4) N. M. Seeds, "Educating for Social Change," *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932.
- 5) *Ibid.*, p. 269.
- 6) L. B. Morse, "For a Wider Vision," *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932, p. 272.
- 7) P. R. Hanna, "The Need for Teacher Training," *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932, p. 274.
- 8) J. A. Hickerson, "Right, Left, or Neutral," *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932.

- 9) *Op.cit.*, “Dare Progressive Education Be Progressive?” p. 263.
- 10) *Op.cit.*, “Right, Left, or Neutral,” p. 278.
- 11) A. Hulsizer, “The Rural Problem,” *Progressive Education*, Vol.9, No.4, April 1932, p. 276.
- 12) H. W. Holmes, “The Teacher in Politics,” *Progressive Education*, Vol.9, No.6, October 1932.
- 13) *Ibid.*, p. 415.
- 14) *Ibid.*, p. 416.
- 15) M. C. Cummings, “How Can the Schools Build a New Social Order,” *School and Society*, Vol.36, No.937, December 1932.
- 16) *Ibid.*, p. 757.
- 17) J. Dewey, *The Quest for Certainty*, Minton, Balch and Company, 1929, Chapter 9.
- 18) W. H. Kilpatrick, *Education and the Social Crisis: A Proposed Program*, Liveright Publishing Corporation, 1932.
- 19) *Ibid.*, p. 69.
- 20) *Ibid.*, p. 69.
- 21) W. H. Kilpatrick, *Philosophy of Education*, The Macmillan Company, 1951, pp. 123–124.
- 22) *Op. cit.*, *Education and the Social Crisis*, p. 76.
- 23) G. S. Counts, “Freedom, in Relation to Culture, Social Planning, and Leadership,”(1932) in J. Dewey, *The Later Works*, Vol. 6, pp. 445–449.
- 24) J. Dewey, “Discussion of ‘Freedom, in Relation to Culture, Social Planning, and Leadership,’”(1932), *The Later Works*, Vol. 6, pp. 142–145. デューイによるカウンツのインドクトリネーション観批判については、拙論「カウンツのインドクトリネーション論の評価の動向」日本デューイ学会紀要第43号、2002年6月で取り上げた。
- 25) R. W. Tyler, “The Responsibility of the School for the Improvement of American Life,” *The School Review*, Vol.52, No.7, September 1944.
- 26) *Ibid.*, p. 401.
- 27) J. J. Pugh, “The Horns of Indoctrination,” *The Clearing House*, Vol.22, No.7, March 1948.
- 28) *Ibid.*, p. 398.
- 29) *Ibid.*, p. 398.
- 30) *Ibid.*, p. 400.
- 31) *Ibid.*, p. 401.